

「春は馬車に乗って」論

——転換点としての「医者宣告」——

大村 慧

はじめに

本稿は横光利一の「病妻もの」のひとつ、「春は馬車に乗って」（『女性』第一〇巻第二号、一九二六年八月）をその作中にみられる、「医者」が「彼」に「妻」の死が近いことを告げた「医者宣告」の場面を作品の転換点として新たに読み直す試みである。

この作品は五つの場面に分かれており、第三場面において、「医者宣告」はなされる。「彼」が「医者」の所へ妻の薬を貰ひに行つた」際に、「医者」から「もう駄目ですよ」と言われる。「医者宣告」により、作品は大きな転換点を迎える

この場面がきっかけとなり、「彼」の性質や看病の方向性の変化に繋がる。なぜなら本作が「妻」の死が到来しつつある過程を描いているからである。そのことは、たとえば冒頭の「海浜の松が風に鳴り始めた。庭の片隅で一叢の小さなダリヤが縮んでいった。」から読み取れる。これまで多く指摘されてきたようにダリヤは「妻」の病状とその進行を、季節の描写とともに表しており、風が吹き、縮んでいったダリヤは「妻」の病状が冬の到来が近づくにつれ、悪化していくことを暗示している。冒頭から死を取り巻く作品であると提示されているのである。

「医者宣告」により「彼」に変化が生じると述べたが、先行研究には「対話」¹、「視線」²、「隠喩」³、「ケア」⁴などの観

点から、「彼」や「妻」の変化を辿つたものなどが見受けられる。

そこでは「医者」の宣告」が変化を辿る際に触れられている。それらを踏まえつつ、本作が「妻」の死の到来について描かれて以上、「妻」の死が決定的になった「医者」の宣告」を作品の転換点に据えることには意義があると考え、その場面を検討した上で、論を進めたい。

一

この「医者」の宣告」に関しては、「絶対者同様の位置にある医者」として「彼と妻が互いにそう遠くはない未来に想定し、それなりに意識してきた死を、いよいよ目前に迫ってきたものとして突きつけることにな」つたとする見方⁵や「医者という他者から死を宣告されたことで、改めて「彼」は妻の死と向き合い、受け入れようとしていく」とする見方がある。本作において「彼」と「妻」以外に書かれた人物は、二人が結婚してからの苦痛な時間を考えた時の「母」や渚の描写の中で紙屑のように座っている二人の「子供」、そしてスイートピーを届けた「彼」の「知人」がいる。いずれも実際には

登場しないが、そのような中で唯一「医者」だけは登場する。その場面を次に引く。

庭の芝生が冬の潮風に枯れて来た。硝子戸は終日辻馬車の扉のやうにがたがたと慄へてゐた。もう彼は家の前に、大きな海のひかへてゐるのを長い間忘れてゐた。

或る日は彼は医者」の所へ妻の薬を貰ひに行つた。

「さうさう。もつと前からあなたに云はう云はうと思つてゐたんですが、」

と医者」は云つた。

「あなたの奥さんは、もう駄目ですよ。」

「はア。」

彼は自分の顔がだんだん蒼ざめて行くのをはつきりと感じた。

「もう左の肺がありませんし、それに右も、もう余程進んでをります。」

「さうさう」と思い出したように「医者」から切り出された内容は「妻」の死が追つてきている、ということであつた。「もう駄目ですよ」、「もう左の肺がありませんし、それに右

も、もう余程進んでをります」と淡々と事実を述べていく様は極めて冷静であり、同時に冷淡でもある。ここでの「医者」は科学的知見にもとづいて診察し、治療を施す客観的な存在であるといえる。で、あるからこそ「絶対者同様の位置」であり、「医者の宣告」は外部から作用した出来事であるともいえる。「彼」は「はア」と返すことしかできず「蒼ざめて行」ってしまい、「医者」の発言を否定することはできない。そしてここで「妻」の死が決定的になった。

こうして「医者」についてみていくと想起されるのが、「彼」の態度であり、第一場面にある「フラスコの理論」である。

彼は自分に向って次ぎ次ぎに来る苦痛の波を避けようと思つたことはまだなかつた。このそれぞれに質を違へて襲つて来る苦痛の波の原因は、自分の肉体の存在の最初に於て働いてゐたやうに思われたからである。彼は苦痛を、譬えば砂糖を甜める舌のように、あらゆる感覚の眼を光らせて吟味しながら甜め尽してやろうと決心した。さうして最後に、どの味が美味かつたか。――俺の身体は一本のフラスコだ。何ものよりも、先づ透明でなければ

ばならぬ。と、彼は考へた。

この苦痛は「妻を貰うまでの四五年に渡る彼女の家庭との長い争闘」「妻と結婚してから、母と妻との間に挟まれた二年間の苦痛な時間」、そして「母が死に、妻と二人になると、急に妻が胸の病気で寝て了つたこれら一年間の艱難」のことである。そしてこれらに加えて、これから訪れるであろう「妻」の死も含まれる。「彼」はこの苦痛を避けようとしなかった。それは「自分の肉体の存在の最初に於て働いていたように思われたから」だという。この場面については、「彼」が苦痛を避けた場面から緘くことができないのではないだろうか。

「妻」の死が決定的になった「医者の宣告」後、「彼」は「いつまでも妻を見たくないと思」い、そうすれば、「いつまでも妻が生きてゐるのを感じてゐられるにちがひない」と考えている。見ないことで「妻」の死から逃れようとする「彼」にとって、見ることに、つまり認識する自身の存在ゆえに「苦痛の波の原因」が「自分の肉体の存在の最初」において働いていたのではないだろうか。

この箇所について従来は「肉体の存在」や「感覚」、「透明」について焦点が当てられていた。ここでは、とりわけ

「透明」であることは重要な点であると考え、「透明」を表した「フラスコ」自体に目を向けたい。

このガラス製の化学実験器具である「フラスコ」は、「客観性」と結びつくものとしてとらえていいだろう。「彼」は自身を「フラスコ」にたとえ客観的に苦痛をとらえようとしているのではないだろうか。一方で「譬えば砂糖を甜める舌のように、あらゆる感覚の眼を光らせて吟味しながら甜め尽してやろう」とあるが、「俺の身体は一本のフラスコだ」に続いて、「何ものよりも、先ず透明でなければならぬ」（傍点筆者）とあるように彼が目指しているものの根底には「客観性」が確かに重要な要素になっている。

「医者」についてみていくと「フラスコの理論」が想起されるとしたのは、この「医者」と「彼」にある「客観性」の重なりからである。

二

そしてそのような「彼」の姿勢は「妻」に対しても向けられ、そのため「彼」と「妻」の間には激しいやり取りが行われる。「食ふためと、病人を養ふためにと別室で仕事をし」

ている「彼」に対し、「妻」は「私の傍をどうしてそう離れたい」のかと責め立てる。それに対して「彼」は病気を治すためには薬と食物がいり、そのため仕事をしていると説明する。しかし、この説明に妻は納得しない。続けて「だつて、仕事なら、ここでも出来るでしょう」という「妻」に対して「彼」は「いや、ここでは出来ない。俺はほんの少しでも、お前のことを忘れてゐるときでなければ出来ないんだ」と返す。また「妻」は「彼」が自身の傍を離れたがっていると感じ、ある日はたつた三度しか病室を訪れることに不満を抱くと、それに対して「彼」は「お前と云ふ奴は、俺がどうすればいいと云ふんだ。俺は、お前の病気をよくするため、薬と食物とをかわなければならぬんだ。誰がじつとしてゐて金をくれる奴があるもんか。お前は俺に手品でも使へと云ふんだね」と突き返す。その返答に対して納得しない「妻」に対して、「しかし、俺とお前の生活はどうなるんだ」ともいう。確かに「彼」のいうとおり、「彼」は「妻」の治療と生活のために働かなければならない。「彼」は現状を客観的、合理的にとらえており、「妻」を納得させようとしているが上手いかない。そもそも「妻」もそのようなことは理解していたはずである。「彼」の言葉は正論ではあるが、「妻」が求

めている態度ではなかった。「彼」は「妻」に対して献身的な看病をしてはいる。「妻」が食べたがる臓物を買ってきたり、聖書を読んで欲しいと言われたら読み上げたりすることもあった。しかし「妻」が本当に何を欲しているかについては全くといっていいほど考えられていない。「妻」は「彼」に対して「あたし、あなたがそんなに冷淡になるくらいなら、死んだほうがいいの」という。「妻」からしてみれば「彼」の態度は「冷淡」なものであった。そんな「彼」に対して「妻」は「あなたはそれほど理知的なのよ。いつもそうなの、あたし、そふ云ふ理知的な人は大嫌い」とはつきりと「彼」の態度を拒絶している。

「妻」がこのように思う理由として芳賀祥子は「ケア」という観点からみて、「妻が求めているのは物質的な看病ではなく、精神的なケア」と指摘する。⁸「あたし、さびしいの」という言葉や傍にいてほしいという主張からも「妻」が求めていることは合理的な態度ではなく、寄り添うことであった。「彼」の看病は「妻」の目からは冷淡に映る。それは苦痛を受け止めるための「フラスコの理論」が「妻」のことを排除した理論になっているからである。「彼」にとっては苦痛を乗り越えるために必要なものだったのかもしれないが、

「妻」の要求に対して答えることができない。また、それは「彼」がある種の「男らしさ」にとらわれているからでもある。「彼」は「妻」のことを説得する際に金銭の話を持ち出す。これは「彼」が夫として「妻」を養わなければならないと考えているからである。「彼」がこのような合理的な態度になる理由としては看病の方向性から説明することもできる。「医者⁹の宣告」前においては「彼」は「妻」の死を看病の先に強くは意識していなかったのではないだろうか。

「医者⁹の宣告」に至るまでに「妻」の死が示されてなかったわけではない。冒頭に「タリヤが枯れていった」と「妻」の病状が仮託されており、「妻」の病状の進行の暗示とともに始まるのである。その上、「痰が一分毎に出始め」たり、「激しい苦痛を訴へ出し」たりしており、病状は悪化の一途をたどっている。しかしそれでも、臓物を「妻」に与える場面などからはそのように思える。また「妻」は「あたし、早くよくなつて、シャツシャツと井戸で洗濯したくつてならない」といい、回復後の姿を思い描いている。

第二場面の「一日に二度ずつ妻の食べたがる新鮮な鳥の臓物」に関する場面では食事と生が結びついている。

「この曲玉のようなのは鳩の腎臓だ。この光沢のある肝臓はこれは家鴨の生胆だ。これはまるで、噛み切った一片の唇のようで、この小さな青い卵は、これは崑崙山の翡翠のようで」

すると、彼の饒舌に扇動させられた彼の妻は、最初の接吻を迫るように、華やかに床の中で食欲のために身悶えした。

「妻」は「彼」の言葉に反応し、「生」と結びつく食欲が出てきている。また他には「彼」の泣き出してしまった「妻」に対して逆に理論を極めて物柔らかに接する場面ではあるが、「俺は、一刻も早く、お前をよくしてやるために、かうして同じ庭の中を廻つてゐるのではないか」といったり、「俺は、お前の病氣をよくするために、薬と食物とを買はなければならぬんだ」と病氣をよくするために看病していることが伺える。たとえ「妻」に死が迫つてきていたとしても「彼」は強く「妻」の死を意識しているわけではなく、「生」を意識し看病している。

しかし、その努力もむなしく「妻」の病状は悪化していく。

彼女の曾ての円く張つた滑らかな足と手は、竹のように痩せて来た。胸は叩けば、軽い張子のような音を立てた。そうして、彼女は彼女の好きな鳥の臓物さえも、もう振り向きもしなくなった。

彼は彼女の食欲をすすめるために、海からとれた新鮮な魚の数々を縁側に並べて説明した。

「これは鮫鰈で踊り疲れた海のピエロ。これは海老で車海老、海老は甲冑をつけて倒れた海の武者。この鰯は暴風で吹きあげられた木の葉である。」

「あたし、それより聖書を読んでほしい。」と彼女は云った。

彼はボウロのように魚を持ったまま、不吉な予感に打たれて妻の顔を見た。

「あたし、もう何も食べたかないの、あたし、一日に一度ずつ聖書を読んで貰いたい。」

と「彼」の言葉には「妻」の食欲を引き出すだけの力もなく、「妻」はその「彼」の言葉よりも聖書の言葉を望んでいる。このような中で「医者宣告」によって、「妻」の「死」が決定的になったときに「生」を想定していた看病は

変化していく。

三

医者の宣言を受けた「彼」が帰ってくると「妻」は様子がおかしいことに気がつく。病室に入ってきた「彼」に対して「あなた。泣いてゐたのね」といい、「彼」はそれを否定するが、「もう分かつてゐてよ。お医者さんが何か云つたのね」と自身の死が決定的になったことを悟る。それから「妻」は死を覚悟したような言葉をみせる。ある日ひどく苦しんだ後で、「ね、あなた、今夜モルヒネを買つて来てよ」と頼む。そして「ええ、あたし、死ぬことなんか一寸も恐わかないわ」と全く死を恐れていない。さらには「もう遺言も何も書いてあるの」と「彼」にも明かす。ここで「妻」はもう死後のことを考えている。自身の未来がないことを受け入れ、「死」への準備を確実に進めている。それは「医者」の宣告があつたことを察し、「死」が決定的になったためである。「彼」に頼み聖書を読んでもらつてゐる際に、「妻」は啜り泣きを始める。「彼」が問いかけると「あたしの骨はどこへ行くんぞでせう。あたし、それが氣になるの」と自身の骨について

て氣にしている。これもまた死後の話である。

医者」の宣告後、比較的、「妻」は自身の「死」を受け入れ、「死」への準備を進めていた。一方、「彼」は「妻」の死をすぐには受け入れられていない。「もう直ぐ、二人の間の扉は閉められるのだ」と「妻」の「死」が決定的になったことを認識しながらも、「事実は悲しむべきことなのだ。それに悲しむべきことを云ふのはやめた貰ひたいと彼は思」つており、未だに「妻」の死を受け入れられていないことがわかる。「彼」には先ほどみた通り、苦痛を受けとめる決心をした「フラスコの理論」があつたが、愛妻の「死」という現実が迫つてきていることを受けとめることはできず、理論は崩壊している。また「妻」が自身の骨について氣にしている場面では、

——彼女の心は今、自分の骨を氣にしてゐる。——彼は答へることが出来なかつた。

——もう駄目だ。

彼は頭を垂れるやうに心を垂れた。すると、妻の眼から涙が一層激しく流れて来た。

「どうしたんだ。」

「あたしの骨の行き場がないんだわ。あたし、どうすればいいんでせう。」

彼は答へる代わりにまた聖書を急いで読み上げた。

と「妻」が死後について考えていることに動揺している。

これまで「彼」は「妻」の疑問や質問に対して、その内容はともかく答えてはいたが、ここではもう「妻」の質問に対して答えられずにいる。これは「妻」の「死」が決定的になつてもなお受け入れられずに死後のことについて考えられないがためである。またここで「彼」が「妻」の死後について話してしまえば、「彼」は「妻」の死が決定的になつたことを認めてしまうことになり、なおさら答えることはできない。そして「もう駄目だ」という独白は「妻」がもう「死」を受け入れてしまつてゐることだけでなく、「彼」自身が「妻」のそのような態度をみて、もう受け入れるほかない状況に追い込まれたことに対してでもある。「彼」は妻の「死」が決定的になつたことを受けとめられずにいたが、それももう限界なのだと言つたのである。

そして「フラスコの理論」は崩壊を迎えた。それは先述した、「みたくない」という「彼」の言葉にも表れている。

「妻」の存在を排除していた理論では、愛妻の「死」を受容することなどできないのである。

それからの「彼」の看病は「死」を意識したものに變化している。

その日から、彼は彼女の云ふままに機械のやうに動き出した。さうして、彼は、それが彼女に与える最後の餞別だと思つてゐた。

とあるように「妻」の要求に應へることがわかる。「医者」の宣告以前の「彼」は「妻」にそばにいて欲しいと言われても應へていなかった。「妻」の「死」が決定的になつたことで「彼」の「フラスコの理論」にもとづく態度が變化したことで、「妻」の要求に應へることができるようになつたのである。ただ、ここには消極的な理由もある。「彼」はそばにいたくないと言つたことがあつたが、これは看病する側の苦痛であつた。「妻」の求める看病ではなかったが、看病は多少なりとも自信を犠牲にして行われる行為である。

「彼」の場合は執筆活動に支障をきたしていた。病状の悪化によりよくも悪くも「終わり」がみえ、「最後の餞別」と思

い、「妻」の要求に応える形になったのである。

四

「彼」は「医者宣告」によって決定的になった「妻」の「死」をなかなか受け止められずにいたが最終的には「妻」とともに「死」への準備を終わらせる。そして第五場面では「完全に死の準備をしてつた」二人に知人からスイートピーの花束が届けられる。二、三の会話の後、「妻」は「明るい花束の中へ蒼ざめた顔を埋めると、恍惚として目を閉じた」。

この場面に関してもさまざまな解釈が試みられた。その中でも小田桐弘子の「妻の病氣、病氣の進行、死への暗示が、すべて、自然の生命現象、しかももつとあでやかなダリヤの精鋭との二重奏においてなされている」という解釈が代表的である。

この意見には同意できるが、ここでは特に最終的にどのように変化していったのか、また「医者宣告」によって「妻」の「死」が決定的になった転換点にも考慮して、改めて各場面の冒頭についてみていきたい。

第一場面では、

海浜の松が鳴り始めた。庭の片隅で一叢の小さなダリヤが縮んでいった。

とあり、季節は晩秋を表している。ダリヤがおそらく健康的であった様子が失われ、「縮んでい」つてしまったことが想像できる。これは「妻」が病氣になったこと、そしてこれから悪化していくことを示している。

第二場面では、

ダリヤの茎が干枯びた縄のやうに地の上でむすばれ出した。潮風が水平線の上から終日吹きつけて来て冬になった。

と季節が移り変わっている。冬自体が生命の終わりを連想させ、「死」と密接にかかわっている。第二場面では冬が訪れ、さらに妻が「死」へと近づいていつて示している。またダリヤは「干枯びた縄のやうに」なり、妻が「激しい腹痛を訴へ出し」たり、「せきの大きな発作が突発し」たりす

るようになった病気の進行を示している。

第三場面では、

庭の芝生が冬の潮風に枯れて来た。

とあり、ダリヤに触れられていないが、ダリヤがある庭全体が枯れている様子が描写され、妻の病気がさらに進んでいったことを示している。実際、この場面では「彼」は医者から「もう左の肺がありませんし、それに右も、余程進んでをります」と宣言を受けており、「妻」の病気はかなり進んでいる。

第四場面は、

花壇の石の傍で、ダリヤの球根が掘り出されたまま霜つていつた。

とある。これまでの場面ではダリヤは「縮んでい」き、「干枯びた縄のやうに地の上でむすばれ出し」、「庭の芝生は冬の潮風に枯れて来」ている。これらは季節の移ろいとともに変化した現象である。自然によって変化した状態に対し、第四

場面では「掘り出され」と人の手が加わっている。そして「掘り出されたまま」とあるようにそのまま放置されている。この人の手が加わっていることは、第三場面での二人に外部から作用した「医者宣告」を示しているとみてよい。また放置されているのは、「妻」の病状が「もう駄目」であり手の施しようがないからである。それはダリヤの元となる球根が腐るという状態からも明らかである。医者宣告は「もう駄目ですよ」の言葉に表れているように「妻」の「死」を決定的なものにした。

第五場面は、

彼と妻とは、もう萎れた一對の茎のように、日日黙つて並んでゐた。

と他の場面よりもさらに異なっている、今までは「妻」の病気の進行を中心に暗示されていたが、ここでは直接、「彼と妻」と示されている。とりわけ、これまでは対象が「妻」だけだったのに対して、「彼」も加わっていることは注目に値する。これは後に続くように、「今は二人は完全に死の準備をしてつた」からである。これまでにみてきたように「医

者の宣告」を転換点として態度が変化していた。そのことが第五場面の冒頭にも反映されているといえよう。「妻」一人だけでなく「彼」も「妻」の「死」が決定的になったことを受け入れ、「完全に死の準備を」した状況がここには示されている。

この第五場面までの表現が「彼」を示していなかったのは、当然、「妻」の病気の進行や「妻」の「死」が示されていたためであるが、「彼」が拒絶していたからでもあった。「彼」の「フラスコの理論」について再度みていきたい。「フラスコの理論」では「彼」は苦痛の原因を自身の肉体の存在と考えており、自己完結していた。自然に考えれば、苦痛は「妻」の「死」であるため、苦痛の原因は「妻」といえるのだが、「彼」はそうは考えていない。見る行為によって苦痛がもたらされると考え、そのため自身の肉体の存在が原因だと考えていた。つまり「フラスコの理論」では「妻」の存在は蔑ろにされていた。だからこそ第五場面までの表現では「妻」の進行や「妻」の「死」が示されていたのである。しかし、医者の宣告によつて「妻」の「死」が決定的になった時、「フラスコの理論」では愛妻の「死」を受け止めることはできず、崩壊する。その結果、「妻」と向き合うことにな

り、「彼」も改めて「死」をみつめることになった。「彼」は「妻」に比べ、「死」をなかなか受け止められずにいたが、最終的には受け止めることができ「完全に死の準備を」することができた。そのため「一対の茎」と示されるようになったのである。

五

このように各場面の冒頭をみると、最終的に「彼」と「妻」の二人が示されるようになった。「医者の宣告」によつて「妻」の「死」が決定的になり、「彼」の「フラスコの理論」が崩壊したことで、「彼」は「妻」の「死」を改めてみつめ直した。また「死」を受け入れた「妻」の様子をみることによつて、「死」の準備ができたのである。

これまでみてきたようにダリヤなど、花や草木が一貫して「妻」の病気の進行や「妻」の「死」、言い換えれば「死」への予感と結びついていた。第五場面の冒頭に「一対の茎」とあるように、二人は夫婦という対であり、同時に「生」と「死」という対比にもなっている。「彼」と「妻」の運命は異なるのである。しかし、そのような違いはあるものの最終的に

「彼」は「妻」とともに死を受け入れる。

或る日、彼の所へ、知人から思はぬスイートピーの花束が岬を廻つて届けられた。

長らく寒風にさびれ続けた家の中に、初めて早春が匂やかに訪れて来たのである。

彼は花粉にまみれた手で花束を捧げるように持ちながら、妻の部屋へ入つていった。

「たうたう、春がやつて来た。」

「まア、綺麗だわね。」と妻は云ふと、頬笑みながら痩せ衰へた手を花の方へ差し出した。

「これは実に綺麗ぢやないか。」

「どこから来たの。」

「この花は馬車に乗つて、海の岸を真つ先きに春を撒き撒きやつて来たのさ。」

妻は彼から花束を受けると両手で胸いつぱいに抱きしめた。そうして、彼女はあの明るい花束の中へ蒼ざめた顔を埋めると、恍惚として眼を閉ぢた。

武下智子はこの最後の場面を

果たしてこれが死の到来なのか否か、判断したい結末である。ただし、ここでは判断を下すことに目的があるのではない。むしろ作品をこのような形で閉じてしまった横光の意図を探ることに意味があるのではないか。

（中略）とにかく「妻」の容態を明確に書くことを回避しているのは事実である。（中略）妻の死を不明確にした終結部は次作の構想の選択範囲を広くとるための横光の配慮によるものであろう。¹⁰

ととらえている。まず「妻」の容態を明確に書くことを回避しているのは事実である」とは必ずしもいえないのではないだろうか。冒頭から「妻」の苦しむ姿とともに「妻の容態」は描かれており、「医者宣告」の場面からはもう左の肺はなく、右の肺も悪化したことがわかる。最後の場面では妻の容態が直接説明されていないが第五場面の冒頭の表現から描かれているといえるし、たとえ描かれていなくとも容態が悪化していることはこれまでの流れから想像できるため、「書くことを回避している」のではなく書く必要がなかったのではないか。

このスイートピーは、送り主は知人ということしかわから

ないが、他者からもたらされたものととらえることができる。また、その文は石橋紀俊が指摘するように第四場面にある「彼女は絶えず、水平線を狙つて海面に突出してゐる遠くの光つた岬ばかり眺めてゐた」という文に呼応している。¹¹

第五場面は冒頭では他の場面とは異なり、季節を示す描写はない。届けられたスイートピーにより「初めて早春が匂やかに訪れて来た」ことを考えたと実際には季節はまだ春になつていないことがわかる。あくまで春を感じさせるスイートピーが届けられただけである。

対比は「生」と「死」がみられるとしたが、それは「彼」が持つてきた「明るい花束」と「妻」の「蒼ざめた顔」である。たとえ「一對の茎」であっても、互いに「死の準備をしてつた」としても、「彼」と妻の待ち受ける未来は異なる。「彼」にはまだ未来が存在し、妻には未来が存在しないことはみたとおりである。これは「彼」も感じていたことであった。「ふたりの間のとびらは閉められるのだ」とあるように自分たちが「死」という扉にはばかれることをわかつている。そして最後の文をみると「妻」は「彼」のことを完全に受け入れていることがわかる。もう一度引く。

さうして、彼女は明るい花束の中へ蒼ざめた顔を埋めると、恍惚として眼を閉じた。

眼を閉じた「妻」からはそれを見る「彼」の視線を浮かび上がらせる。「彼」の「妻」を見る視線とは一方的なものであった。その様子は第二場面に顕著に現れている。「彼」は「妻」の様子を「檻のやうな寝室の格子の中」にいるようにみており、「お前をここから見てみると、実に不思議な獣だね」という。そして「檻の中の奥さんだ」ともいつている。

これらの表現から「彼」は「妻」が視線を向けられる存在であると認識していることが伺える。当然、「妻」も「彼」に對し、視線を返すことも可能であるが、「檻の中」にいる以上、一方的な視線にさらされているといえる。そのような「妻」が最後の場面では眼を閉じている。眼を閉じ、視線を返さないことでさらに一方的な視線に晒されることになるが、このような非常に無防備な状態になることができたのは「彼」が変化したからである。

おわりに

「医者」の宣告」をきっかけとし「彼」の合理的で、冷淡な態度はなくなった。スイートピーがどこからきたのかという「妻」の質問に対し、「春は馬車に乗つて」と比喩を用い、「撒き撒き」と繰り返される軽やかな言葉によって返答している。また「妻」との会話も穏やかであり、噛み合っている。「彼」は「妻」の言葉を肯定し、受け入れている。「彼」のそのような態度もあり、「妻」は眼を閉じることができたのである。そして「彼」との運命の違いと自身の死を「スイートピーの花束」とともに受け止めているのである。

ここまでみてきたように、本作の転換点を「医者」の宣告」としてとらえることにより、「妻」の「死」が決定的になったことが「彼」の変化に多大なる影響を与えていたことがわかる。また看病の方向性は「生」から「死」へと変わっていった。最終的に二人は医者」の宣告をきっかけとして「死」への準備を終え、「一対」になったとき、「妻」の「死」は訪れることになったのである。

注

- 1 石田仁志「横光利一「春は馬車に乗つて」論——対話を軸として」『芸術至上主義文芸』第一七卷一九九一年
- 2 武下智子「視線の変容——「春は馬車に乗つて」を中心に」『名古屋自由学院短期大学研究紀要』第二五号、一九九三年
- 3 柚谷英紀「春は馬車に乗つて」論——隠喩の変容——「横光利一研究」第二二号、二〇一四年
- 4 芳賀祥子「ヘケア」の苦闘——「春は馬車に乗つて」における「病まう妻」と「看取る夫」——「横光利一研究」第二二号、二〇一四年
- 5 宮口典之「春は馬車に乗つて」試論「名古屋近代文学研究」第一〇巻、一九九二年
- 6 4に同じ
- 7 5に同じ
- 8 4に同じ
- 9 小田桐弘子「横光利一 比較文学的研究」南窓社、一九八〇年
- 10 武下智子「視線の変容——「春は馬車に乗つて」を中心に」『名古屋自由学院短期大学研究紀要』第二五号、一九九三年
- 11 石橋紀俊「春は馬車に乗つて」論——作品のテーマ論的全体性とその言葉の響き——「都大論究」第三二号一九九四年六月

本文の引用は『定本 横光利一全集』第二巻（河出書房新社）に依拠し、旧字体は適宜新字体に改めた。

（おおむら・さとし 成城大学大学院博士課程前期）